

道徳科通信

2022 no.

3

光村図書

編集部だより

先日、スマートフォンの使い方でもたついていると、高校生になる娘から「お母さんは『情弱』だからね」と言われた。「じょうじゃく」？ 聞き慣れない言葉に、何を言われているのかわからなかった。尋ねてみると、「情報弱者」のことを指すらしい。情報弱者とは、「情報の探索や評価のための基礎的な知見や能力が乏しかったり、情報機器の基礎的な理解や入手、操作が困難だったりする人のこと」のようだ。

情報機器の進歩、ソーシャルメディアの発達はすさまじい。情報機器を使いこなせないと、仲間内でも肩身の狭い思いをすることがたびたびである。機器を上手に使える者は有益な情報も得やすいだろうし、社会的に優位な立場になりうることもあるだろう。その重要性ゆえ、インターネットにアクセスできることが、「人権」の一つとして語られるようになってきている。生まれたときから当たり前に情報機器に囲まれて育っている子どもたちといっしょに、何を考えていくことが必要なのか。改めて考えさせられる特集となった。

17万部
突破！

こどもとおとなと、 そのあいだのひとたちへ

がっこう、たのしい、うそ、友だち、しあわせ、
自分、正義、ゆるす、自立、立場、ふつう、夢、
そして「考える」ということ——。

ふとした瞬間にうかぶ「なんだろう」を、
大人気絵本作家・ヨシタケシンスケが徹底追究！
道徳教科書（小1～中3／光村図書）のコラムに、
かきおろしを加えた一冊です。

なんだろう なんだろう

ヨシタケシンスケ 作／定価：1,650 円(税込)
237mm × 186mm ／ 48p ／ ISBN978-4-8138-0264-8



光村図書Twitter公式アカウント

光村図書の懐かしの教材や、教科書にちなんだ豆知識やクイズなど、
教科書を身近に感じていただける情報をお届けいたします。

フォローはこちらから➡



光村図書

道徳科通信 No.3 2022年6月10日発行

発行人 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社 〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9 TEL.03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp E-Mail koho@mitsumura-tosho.co.jp

デザイン 鷹峯麻衣子 イラスト カトウミナエ／熊本奈津子／霜田あゆ美 印刷所 協和オフセット印刷株式会社

●個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。

詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

●広報誌の配送停止については、光村図書出版までご連絡ください。

特集

GIGAスクール時代の 情報教育

〈対談〉

情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育
三宅健次・高橋暁子

〈インタビュー〉

「マジョリティが変わるための報道」を目ざして
安田菜津紀

連載

知って役立つ発達心理学③ ……7

渡辺弥生

わたしの授業レポート ……8

「クラスの大へんしん」(小2) 木村純也・新川 靖

「二通の手紙」(中3) 平野桜子・荒木寿友

道徳授業で哲学鍋を④ ……12

吉野一徳

GIGAスクール時代の情報教育

多様なデジタルメディアやサービスが次々に生まれ、身の回りを多くの情報が飛び交う現在、情報との向き合い方は、道徳科でも重要な課題です。今回の特集では、これからの情報モラル教育と、メディアと社会との関わりについて考えます。

【対談】

情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育

GIGAスクール構想を契機に、これまで進められてきた情報モラル教育をよりよく見直していこうという議論が進んでいます。

長年、情報モラル教育に携わってきた三宅健次先生と、ITジャーナリストの高橋暁子先生に、子どもとメディアの関わり方のこれからについて話し合っていました。



三宅健次

Kenji Miyake

千葉大学客員教授・教育学部附属中学校副校長。文部科学省主催「メディア教育指導者講座」の講師や「情報モラルに関する指導の充実に資する調査研究」等の委員を歴任。光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。



高橋暁子

Akiko Takahashi

ITジャーナリスト。成蹊大学客員教授。SNSや情報リテラシー教育が専門で、NHK「あさイチ」「クローズアップ現代+」等に出演。『小学生から知っておきたいネットのルール』（監修／新星出版社）等の著書がある。

親世代と子ども世代のギャップ

三宅 「情報モラル」という言葉が義務教育の中に登場したのは、1998年に告示された中学校学習指導要領の技術・家庭科からでした。道徳では、2008年告示の小学校学習指導要領で、初めて情報モラルが取り上げられ、そこでは「情報モラルに関する指導に留意する」とされました。「特別の教科 道徳」となった2015年の小学校学習指導要領では、情報モラルは、「留意する」から、「充実する」となり、より重視されるようになりました。改めて振り返ると、今の子どもたちの親世代は、実は、情報モラル教育をほとんど受けてこなかった世代といえます。

高橋 そうですね。親世代は、使っ

てきたメディアも今の子どもたちと違いますし、仕事で部分的に知っているとしても、メディア全般について詳しいわけではありません。それに対して、子ども世代は、新しいメディアに飛びつく傾向にあり、柔軟に利用しています。そんな子どもたちが、親の目をかいくぐって使っていることからくるトラブルが多いように感じます。近年、よく相談を受けるのが、子どもにスマートフォンを持たせてよいか、利用する際にどう見守ればよいかということです。

三宅 やはり、スマートフォンの取り扱いが問題になるようですね。サービスを提供する側は、どう対応しているのでしょうか。

高橋 メディア側からすれば、スマートフォンも、各種サービスやアプリも、利用してもらえばもらうほど利益が出るので、基本的には、「自由に使い放題」というのが従来のスタンスでした。しかし、2018年に、WHOが、ゲーム障害を国際疾病とする方針を示してから、潮目が変わりました。以降、ペアレンタルコントロールを実装した機器やサービスが定着しました。「制限できるよう

にしたので、使ってください」という考え方です。しかし、保護者側の認知度がまだ低いのが現状です。フィルタリングや利用時間制限などのペアレンタルコントロール機能を知らずに、「子どもが長時間使って困る」という相談を多くもらいます。

GIGAスクール構想の中で

高橋 ところで、GIGAスクール構想がコロナ禍で前倒しになり、1人1台端末が整備されました。学校現場での受け止めはいかがでしょうか。

三宅 まず、子どもたちのインターネット利用について振り返ると、何段階かのフェーズがあったと思います。家庭にインターネットが普及した頃は、ネットの閲覧、電子メールや掲示板を利用するくらいで、問題も、せいぜいそこにいたずらを書き込むといった程度でした。その次に、携帯電話が登場し、2000年代は、女子中学生の間で、「プロフ」が流行しました。その後、スマートフォンの普及率が一気に上がります。これが大きな変化でした。SNSの利用が広がり、それに伴って、今までの情報モラル教育では抑え切れないよう

な問題が多発するようになりました。

高橋 そこに、GIGAスクール構想が重なってきたのですね。

三宅 はい。これまでは、スマートフォンを子どもに持たせるかどうかは、各家庭の判断だったので、学校側は、「スマホの問題は保護者の責任ですよ」と言えばよかったのです。ところが、学校側が導入した1人1台端末になると、学校の責任は大きくなります。端末を持ち帰って、家

デジタル・シティズンシップとは

デジタル・シティズンシップは、各国で取り入れられており、国によって盛り込まれる要素が異なるが、以下の9要素が一般的なものである。デジタル・シティズンシップ教育は、これらを実現するためのもので、要素を見ると、日本の情報モラル教育と重なる部分も多い。

- ① 平等なテクノロジーへのアクセス。
- ② インターネットでの安全な売買。
- ③ 情報をインターネット上で適切かつ安全に共有、協働。
- ④ デジタル・リテラシー、メディア・リテラシー、情報リテラシー。
- ⑤ 礼儀正しい行動規範によるテクノロジーの利用。
- ⑥ インターネット上で見つけたテクノロジーやコンテンツの合法的な利用。
- ⑦ インターネットの自由と責任。
- ⑧ デジタル世界における身体的・心理的健康。
- ⑨ インターネット上の安全。

庭でゲームばかりしているといった相談が寄せられることもあります。今までは、ICT担当の先生や生徒指導の先生に任せていた問題に、全ての先生が関わらなくてはならなくなってきたのです。

高橋 コロナ禍で端末の整備が前倒しになったこともあり、先生へのICT研修が足りていないという声もあります。知識が十分でなく不安だ、対応し切れていないかもしれないという悩みも聞きます。これから、学校現場で、どのように端末が使われていくのか、気になるところです。

三宅 そうですね。実は90年代、各学校にコンピュータ室が設けられたとき、多くの学校では、コンピュータの授業時以外は施錠していたようです。休み時間に使わせると、逸脱した使い方をする子どももいて、その指導が大変だという理由です。1人1台端末になった今、同じ考えでよいのだろうか、という気がします。子どもに自由に使わせるという方向にシフトできるかどうか、その覚悟が求められるのではないかと思います。

情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育

三宅 これまでの情報モラル教育は、やむをえない状況があったとはいえ、「～してはいけない」「～しないほうがよい」という文言が多用され、「べからず集」的なものが多かったようです。これでは、デジタルメディアに対して、ネガティブな見方をもってしまうでしょう。そこで、今、注目されているのが、デジタルメディアを積極的に、ポジティブに活用していく「デジタル・シティズンシップ」という考え方です。

高橋 「シティズンシップ」、つまり、「市民性」と関連した考え方なんです。

三宅 はい。「デジタル・シティズンシップ」という言葉は、欧米で生まれました。欧州評議会では、「効果的なコミュニケーションと創造力を用いて、デジタル環境に積極的、批判的かつ的確に関わり、責任をもって情報技術を用い、人権と尊厳

を尊重した社会参加を実践する能力」とされています。欧米では、「シティズンシップ（市民）教育」が定着しています。そこに、「デジタル」という要素を加えたものと考えてください。すでに、現代社会は日常生活自体が情報化、デジタル化されています。このような現代の状況を取り込んだうえでの「シティズンシップ（市民性）」ということです。

高橋 「人権と尊厳を尊重した社会参加」を掲げているところがポイントですね。

三宅 そうです。「デジタル・シティズンシップ」教育では、もちろん情報モラル的な内容も扱います。しかし、ポイントは、社会人、市民としての在り方を問題にしているところです。社会人としての心構えを身につけていく中で、ネット上の振る舞いやスキルも身につけよう、ということです。自分が、外に向かって、役立つ社会人になっていくことを目指すのですから、リスクがあってもどんどん活用していくという考え方です。負の部分よりも正の部分の伸

ばすように使っていくというスタンスなのです。

高橋 例えば、「ネット依存」の問題に対しては、これまで「～しない」という行動抑制を求めていたと思います。デジタル・シティズンシップ教育の考え方では、この問題をどのように捉えていくのでしょうか。

三宅 デジタル・シティズンシップ教育では、自分の生活スタイルの中で、自分の「メディアバランス」を考えていきます。現在、メディアもいろいろありますから、1日の中で、どのメディアをどのくらいの時間、どんな目的や理由で使うのかを考え、自分で使い方を調整するのです。

高橋 周りが、「1日〇時間まで」と決めるのではなく、自分自身で考えるのです。

三宅 そうです。時には、友達と自分のメディアバランスを比較してみることも大切です。友達がどのような意識でメディアを使っているかを知り、それを受けて、自分はこうしよう、と考えるのです。友達は将来、ゲーム制作者になりたいから、ゲー

ムのプログラミングを何時間もやっている。自分は音楽が好きだから、ネットで世界の音楽を聴く。人によってそれぞれメディアの使い方は違ってよいはずですが。社会にも目を向け、また、違いを認め合いながら、自分だったら、どのようにメディアを使うかを考えるのです。

高橋 従来の情報モラル教育が、デジタル・シティズンシップ教育に取って代わるということなのでしょう。

三宅 両者は、理念や背景が異なります。置き換わるということではなく、これまでの情報モラル教育に、デジタル・シティズンシップ教育の視点を取り込みながらやっていけばよいと、私は考えています。

自律的にメディアに関わる

三宅 ポジティブにデジタルメディアと付き合っていく事例は、高橋先生が普段、接している大学生にもよく見られるのではないのでしょうか。

高橋 はい。中学生は夢中になりすぎてトラブルに陥ることが多いよう

ですが、高校生、大学生は、効果的に活用していますね。試験勉強の期間はSNS断ちをしたり、アプリを削除したりして、自己管理し、また、塾などが配信するYouTubeの学習用動画や、「スタディサブリ」といった学習用のアプリを活用する学生もたくさんいます。

三宅 自律的な付き合い方ができているようですね。

高橋 そうです。最近の若者は、かなり早い時期からデジタルメディアを使い始めていることもあり、途中で自分の依存状態に気づいています。はまり込まないように、どうしたらよいか試行錯誤しています。「シティズンシップ」というところまではいいませんが、折り合いをつけながらうまく使っているようです。ネットの利用時間が長かろうとも、自分の心身や生活に悪影響がなく、目的とすることができればよいという意識のようです。

三宅 まさに、負の部分ではなく、正の部分を伸ばしていくという発想ですね。



高橋 そうですね。確かに、学生から、ネット詐欺の被害やSNS上の対人トラブルについての話も聞きます。しかし、彼らはそれでも、「怖い」というよりは、「便利だ」と捉えています。使いこなせば効率もよく、自分にグッと響けば何も悪いことはないという考えです。

三宅 中学生も同じです。彼らにとって、友人関係は非常に大切なものです。その友達とのつながりを保つ便利なツールとして、SNSがあれば、子どもはそれを使うことを選びます。多少、失敗を経験しても、「使わない」という選択肢はありません。大人だったら、何か失敗をすると、懲り懲りだとなりがちです。しかし、子どもや若者はそんなふうにながティブにはならないものです。

高橋 大学生ぐらいになると、みんな多かれ少なかれ失敗しています。失敗からしか学べないこともあります。悪い大人とつながらないようにすることと、命に関わることをカバーして、あとはどんどん使わせていけばよいのではないのでしょうか。

三宅 同感です。やる前から行動を制限してしまうと、ネット社会でたくましく生きていく力はつかないのではないかと考えます。

高橋 先生の学校では、デジタル・シティズンシップ教育の考え方を生かした実践は行われていますか。

三宅 私の勤務校では、「ICT推進生徒委員会」というものを立ち上げ、1人1台端末の管理を生徒自身に任せています。生徒たち自身で「未来につながる、品位と思いやりあるICT活用」という目標を掲げ、ルールを設けました。当然、休み時間も使用可で、うまくいかないことがあると、放送で、「もっとこうしてください」など呼びかけています。自分たちで作ったルールだから自分たちで守る、というスタンスです。

高橋 まさに、「シティズンシップ」につながっていく活動ですね。

三宅 もちろん、学校や自治体によって状況は違うでしょうから、学校ごとに、可能な範囲で対応していくことが大切だと思います。

道徳科で何ができるか

高橋 今、ネット上には、フェイクニュースもあまた見られ、その情報は玉石混交です。また、フィルターバブル^{*1}や、エコーチェンバー現象^{*2}などによって、偏った情報にとられる危険性も大きくなっています。しかし、三宅先生と話してきたように、危険があるからいっさい使わない、ということにはならないでしょう。

三宅 道徳科では、どんなことができるでしょうか。

高橋 私は、道徳の専門家ではありませんが、日頃から、意見が分かれることについて話し合わせるのが大事だと思っています。大学でも、なるべく「正解」がないことについて話し合せています。一つのことに対して、見方や立場によって、意見が違うということを感じる経験を重ねていく。価値観やものの見方は、人によってばらばらで、正解は一つじゃない。自分とは違う見方も受け止め、そのうえで、自分がどうすればいいかを考えることが大事です。これは、まさに道徳の授業だからこそできることだと思います。

三宅 私も同じように考えています。現代は、多様性が求められる時代。答えは一つではありません。その中で、自分ならどうするかということを考えさせることが大切です。デジタル・シティズンシップは、多様性を認め、そのうえで、自分ならどうするかを考えていくというスタンスです。道徳科で情報モラルを扱うときには、こうしたデジタル・シティズンシップの考え方も取り入れていきたいと考えています。

【インタビュー】

「マジョリティが変わるための報道」を目ざして

情報を活用し、社会をよりよく変えていくために、私たちはメディアや報道をどのように考え、関わっていけばよいのでしょうか。さまざまな現場取材してきたフォトジャーナリストの安田菜津紀さんにお話をききました。



安田菜津紀
Natsuki Yasuda

1987年神奈川県生まれ。認定NPO 法人Dialogue for People (D4P) 副代表。『写真で伝える仕事ー世界の子どもたちと向き合ってー』（日本写真企画）、『あなたのルーツを教えてください』（左右社）等の著書。他、テレビやラジオ等に出演。



大切にしてきたこと

これまで、東南アジアや中東、アフリカなどの貧困や難民の問題を取材してきました。東日本大震災後は、親族がいた陸前高田市を中心に記録を続けています。今、力を入れているのは、日本に逃れてきた難民の人たち、入管の収容所で苦しんでいる人たちなど、日本における外国人や、外国にルーツをもつ人々の人権問題です。

日々の生活に精一杯の人たち、心身ともに傷ついて日本に来る人たちは、自分から声を上げることが難しい状況にあります。元々大きな声をさらに轟かせるのではなく、自ら伝える手段をもたない人たち、置き去りにされがちな人たちの声を伝えたい、常にそう考えてきました。

差別に対する気づき

私は中学2年生のときに父親を亡くしました。そして、高校生のとき、父親が在日コリアンだったことを知りました。

自分が「日本人」であることに何の疑いももっていなかった頃は、隣国のことを侮蔑的ニュアンスで報じる番組を見ても、気にも留めません

でした。朝鮮半島情勢が緊迫したときには、日本にある朝鮮学校に数々の嫌がらせが行われましたが、そんな問題にも背を向けていられたのです。在日コリアンへの差別は、まさに自分の父に向けられたものだったのですが、当時の私にとって、差別の痛みは、皮膚の外にあるものでした。私は、日本社会のマジョリティ側について、差別に気づかず、生きてこられたのです。

「日本は法治国家だから、差別は防げている」という声も聞かれます。しかし、現に、在日コリアンの人たちや、マイノリティ性をもった人たちの中には、インターネットなどで誹謗中傷や脅迫を受け、生活に支障を来している方もいます。差別は、あなたの目の前になかったとしても、あなたの真横、すぐ背後に存在するかもしれない。そこに、目を向けてほしいのです。

社会に参加する若者たち

今、マジョリティ側にいる若い人たちが差別の実態に気づき、それを変えようとする動きがあります。2021年3月6日に名古屋出入国在留管理局で亡くなったウィシュマさん^{*}について、大学生、高校生が声を上げました。彼らは、

^{*}1 インターネット上の検索エンジンはその仕組み上、使用履歴に応じて、各自の好みに合った情報が優先的に表示される。このことによって、自分と異なる意見やさまざまな情報に触れることがなくなっている状態を指す。米国のイーライ・パリサーによる造語。

^{*}2 SNS上で考え方の似た者どうしが交流し合うことによって、特定の意見や思想が増幅され、より偏った方向に向かってしまうこと。

^{*}スリランカ人女性ウィシュマ・サンダマリさんは、2017年6月、留学の在留資格で来日した。その後、在留資格を失い、20年8月、名古屋出入国在留管理局に収容され、21年3月に亡くなった。収容中の不適切な処遇や医療体制の不備が指摘され、遺族や支援者が情報開示を求めた。

真相究明のため、情報開示を求めるオンライン署名を行いました。企画した学生は、こうしたことが起こってしまう国の在り方への怒りと同時に、今まで問題に背を向けてきた自分にも怒りを感じたといいます。同級生に外国ルーツの子がいて、これは私の友達の問題なんだと、参加した学生もいました。自分が身近で大切にしていることから、問題をたぐり寄せ、インターネットなども生かして、社会を変えようとしていく若者の姿には、希望を感じます。

当事者がどんなに声を上げても、社会の仕組みやマジョリティの態度が変わらないかぎり、根本的解決にはつながりません。報道などをきっかけに、多くの人が「おかしいよ」と声を上げて初めて、行政や国の重い腰が動くのです。

マジョリティが変わるために

差別に苦しむ当事者がつらい経験を話してくださるのは、メディアや、それを聞く人に、問題を託すためです。当事者は、「この声を広げてください。この声が世界を変えるきっかけになりますように」と、メディアにバトンを手渡すのです。しかし、メディアが、「当事者だけの問題」として報じてしまうと、いつまでも、その声を「消費」するだけになってしまいます。

ウィシュマさんの取材では、コロナ禍の中、彼女の故郷であるスリランカの実家を訪ね、ご家族や知人の話を聞きました。ニュースとして、彼女がどのように亡くなったのかを伝えるのも大事ですが、それに終始してしまうと、彼女が、悲惨な被害者のシンボルとして「消費」されてしまうだけだと考えたからです。彼女は一人の人間として生きてきた。どのように生きてきたのかが伝わらなければ、命が奪われたという重みも伝え切れない。そう考えての取材でした。

ウィシュマさんのご家族は、つらい現実を突きつけられながら、「人間を人間として扱ってほしい。それを繰り返さないための仕組みを作ってほしい」というメッセージを私たちに伝えてくれました。「人間を人間として扱ってほしい」と誰かに言わせてしまっているのが、私たちの今の社会です。社会を変えていくのは、

バトンを託された私たちなのです。

新著『あなたのルーツを教えてください』では、外国にルーツをもつ多くの人々に取材しました。彼らは、個人の努力で困難を乗り越えてきました。それらを、「美しい話」で終わらせないことが必要です。差別の問題を、マイノリティ個人の努力に矮小化しているからこそ、ウィシュマさんのようなことが起きているのです。マイノリティにがんばらせる社会じゃない社会を目指したい、この本は、そんな投げかけとして書いたものです。

情報社会を生きる子どもたちへ

今は、巨大なホースから水（情報）が出ていて、そこに直接口をつけて水を飲みなさいと言われていたような時代だと思います。常に、いいねボタンを押す？ 押さない？ と、立ち位置の表明を求められ、SNSでは、自分が発した言葉に、多くの同意が集まると、それが世界の全てだと錯覚してしまいそうになる。インターネットは、自分の世界を広げてくれているようで、実は狭めているものなのかもしれません。

そんな今だからこそ、立ち止まって考えることが必要だと思います。フェイクニュースではないかな？ リツイートして誰かを傷つけないかな？ と立ち止まり、自分と対話する。SNSで誰かとつながることと同じくらい、「自分との対話」を大切にしてもらいたいと思います。



道徳授業を成功させよう

知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe
(法政大学教授)

第③回 子どもたちが思う「ずるい!」とは

子どもたちの学校での様子を見てみると、「ずるいぞ!」「ずるくないよ!」という言い合いを耳にすることがあります。モノを分ける、道具を使う、係や役割をめぐって、きまりを守ったかどうか、時には、先生の方針について、「ずるい」「ひいきだ」といった判断を声高に主張します。いったい子どもたちは、どんな場合を「ずるい」と判断するのでしょうか。特に、モノを分け合ったり、役割を分担したりするような、分配に関する正義は、分配的正義（Distributive Justice）とよばれています。

公正観の発達

分配的正義についての認識は、子どもの成長とともに発達すると考えられています。ところが大人は、こうした子どもの認識をあまり考慮せず、つい慣習的に正解を与えようとするところがあります。一つしかモノがないとき、二人が存在していれば、そのモノを半分にして、「さあ、半分ずつにしたから喧嘩しないように」といった解決法です。

しかし、子どもたちの判断は、必ずしも大人と一致するわけではありません。

小学校低学年は、利己的欲求が強い時期なので、誰もが自分に多くしたいと考えます。「自分のほうが体が大きいから」などと、いろいろな理由をつけて「利己的分配」を主張します。そのうち、「絶対同じがいい!」という「均等分配」を求めるようになります。理由を尋ねると、「そのほうが喧嘩しないから」と答えます。

中学年を過ぎると、「がんばった人に、よりたくさんあげてもいい」という、貢献度に応じた「公平分配」を望む子どもが出てきます。高学年以上になると、「必要としている人に、より多くあげてもいい」と、個々が置かれている状況や立場を考えることができるよう



になります。さらには、相手に多くあげる「愛他的分配」ができる子も登場してきます。

子どもに理由を考えさせてみよう

こうしたモノやコトの分配を、誰にとっても公平だと思えるように話し合い、生活の中で解決していく機会を与えることは、子どもたちの認識を豊かなものにしていきます。大人が一方的に、あるいは慣習的に「はい、喧嘩しないように半分ね」「はい、順番ね」という単純な解決法を示してしまうと、大人が思う以上に「ずるい!」という不満をもたせるかもしれません。

例えば、コンテストで、どんなにがんばっても、他の子と同じ参加賞をあげるほうがいいのか、貢献度に応じて賞を変えるほうがいいのか。子どもたちの意見に耳を傾けることは、子どもの公正観の発達を知ることになり、また、子どもが納得のいく解決のプロセスを考えるきっかけをつくることになります。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』（筑摩書房）、『子どもの「10歳の壁」とは何か？ 乗り越えるための発達心理学』（光文社）など。監修に『まんがでわかる発達心理学』（講談社）など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。

「クラスの大へんしん」

出典：光村図書「どうとく2 きみが いちばん ひかるとき」



広島大学附属東雲小学校
教諭
きむらじゅんや
木村純也

学年 2年 内容項目 C(14) よりよい学校生活、集団生活の充実

ねらい 学級での生活をよりよいものにするために必要なことを考え、自分が大切にしたいことを文章や絵で表現することを通して、つくりたいクラスを実現しようとする意欲を高める。

わたしの授業、ポイントはココ！

この授業は、道徳や特別活動を組み合わせた「居心地のよいクラスをつくるために大切にしたいことを考える単元型学習」の中の1時間です。「よりよい学級」について一人一人が考えられるように設定しました。

この教材は絵が中心です。文脈のない絵だけの教材だからこそ、それを見た児童は直感的な気づきを口にします。「節度、節制」、「規則の尊重」、「善悪の判断、自律、自由と責任」など、さまざまな角度から語っていました。最初は「髪を引っ張るのはだめ」などの、絵をひと目見てわかる内容でしたが、徐々に「重いものを運ぶ

友達を手伝っていて、いいと思う」など、**周囲にも着目した発言が出てきました。その後、児童の意識は「学級としての望ましさ」へ向き始めたようです。**最後は、自分たちがつくりたいクラスをつくるために大切だと思うことを、一人一人が文章や絵で表しました。

単元型学習としては、**この授業の振り返りを基に、さらに二つの道徳教材（『黄色いベンチ』『ぶらんこ』）を関連づけたり、大切にしたいことを特別活動（学級会）で話し合ったりしました。**道徳での学びを実生活に生かそうとする児童が育っていれば、うれしいです。

木村先生の授業、ココに注目！

道徳科において大切にしたいことの一つは、生活との結び付きです。2枚の絵を見ながら「残念だな」「いいな」と思うところを見つけていく中で、児童は自分と友達の日常生活に、自然と思いをはせているのではないのでしょうか。さらに、この実践では、単元型学習にすることで、児童の学びを道徳科に閉じ込めることなく、意図的に日常生活へと開いていこうとしています。道徳科を「道徳教育の要」として生かすための、効果的な工夫の一つであるといえます。

関西福祉大学 教授
しんかわ やすし
新川 靖

教材の内容 あるクラスの様子が描かれた2枚の絵。P.68・69には、散らかった教室でいたずらや意地悪をする子どもたち。P.70・71には、きれいに整頓された教室で仲よく過ごす子どもたちが描かれている。



教科書 P.70・71



教科書 P.68・69

1

学級目標について振り返る

発問 学級目標の「元気」という言葉には、どんな気持ちが込められていたんだっけ？

- みんなが、元気になるように。
- うれしいことがあるように。
- 元気で、何でもできるように。
- 心をついに、元気でいるように。
- みんなが、健康で元気でいられるように。

▶「元気なクラス」にするために大切なことを、今日の授業でいっしょに考えましょう。

本時は、単元型学習の1時間目として位置づけているため、学級目標に含まれている「元気」という言葉に込められた気持ちを振り返ることで、実生活に起因し、実生活に帰着するような学習課題の設定を試みた。

2

教科書の絵を見て、「残念だな」「いいな」と思うところに印を付ける

発問 2枚の絵があります。

（黒板の右に教科書P.68・69の絵を、左にP.70・71の絵を貼る。）

- いけないんだ！ 黒板に落書きしている。
- 左（の絵）のほうが、きれいに見えるな。
- ▶何か、みんなにお話ししたいことはありますか。
- こっち（右の絵）は物がぐちゃぐちゃで、こっち（左の絵）は整頓しています。
- 黒板に落書きをしてはいけないと思います。
- 教室の中を走っている人がいて、危険です。

発問 「残念だな」と思うところや、反対に「いいな」と思うところを、丸で囲みましょう。

- 一つだけです。物でも人でもいいですか。
- ▶どちらでもいいですよ。たくさん見つけたら、たくさん印を付けてごらん。

児童が比較しながら考えることができるよう、2枚の絵を同時に提示した。

児童の直感的な気づきを大切にするため、教師からは、絵の中の状況を説明しないことにした。

丸を付けている児童の手が止まるまで、時間を取った。じっくりと絵を見ることで、直感的な気づきを吟味して望ましさの判断ができるようにした。

教科書の絵を見て感じたことを、交流する

発問 「残念だな」と思ったことから、聞いてみようかな。

- 友達の髪を引っ張っているところが悪いなと思いました。
- 友達としゃべっていて、重そうなものを持っている人を手伝っていないから、丸を付けました。
- 話しかけられているのに無視しているみたいだから、丸を付けました。

▶この子が、話しかけられているのに、知らんぷりしているみたいに見えたんだね。

発問 「いいな」と思うところは、ありましたか。

- 男の子と女の子が、楽しそうにお話をしているところです。
- 黒板をきれいに消しているところです。
- こっちを見ている友達を、お話に誘ってあげようとしているところです。

▶誘ってあげたり、教えてあげたりしているみたいだから、「いいな」と思ったんだね。

- 確かに、言われてみればそうだ。

中心的な発問 みんなが思う「元気なクラス」って、どっちの絵に近いのかな。

- そっちじゃないよ。左、左！
- うん。左だ。そっちに近いと思う。
- ▶みんなは、こんなクラスにしたいのか。なるほどね。

板書では、丸印の色を変えることで、「残念だな」「いいな」と思える場面を、視覚的に区別しやすくし、意見交流の視点を焦点化した。

「○○だけど、△△していない」や「○○だから、□□しようとしている」のように、周囲の様子にも着目して行為の望ましさを判断している意見が出た際は、教師が状況を整理して言い直すなどし、発想を全体で共有できるようにした。

教材を通した学びをきっかけとして、自分のクラスや自分の生活を見つめ直すことができるように問いかけた。

3

自分がつくりたいクラスの実現のために、大切にしたいことを書く

発問 つくりたいクラスのために、どんなことが大切か、書いてみよう。

- みんなが優しくし合って、元気なクラスがいいと思います。いたずらや無視をしないクラスがいいです。（「待って」と、外へ遊びに行く友達に話しかける絵を描き添えている。）
- 悪いことをせずに、してもらってうれしいことができるクラスにしたいです。（教科書を配っている絵を描き添えている。）

文章だけでなく、絵や図での表現も認め、自分の内面を表出しやすくした。2年生では、最後に自分自身としっかり向き合うことができるよう、振り返りの時間を7分程度は確保するようにしている。

「二通の手紙」

出典：文部科学省「私たちの道徳 中学校」

神奈川県鎌倉市立第二中学校
教諭
ひらの さくら こ
平野 桜子

学年 3年 内容項目 C(10) 遵法精神、公德心

ねらい 法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、規律ある安定した社会を実現しようとする態度を養う。

わたしの授業、ポイントはココ！

私が道徳の授業で大切にしていることは、自ら問いを生み、考え続ける姿勢を養うことです。道徳の授業では、些細な出来事から疑問をもち、問いを見いだすことがとても重要だと考えています。中学校を卒業した後も、日常生活の中にある道徳的な課題に気づき、問いを生み出し、考え続ける姿勢をもち続けてもらいたい。そのため、1年生のときから、生徒が疑問に感じたことを大切に授業をしてきました。3年生では、根気強く考える力が養われつつあるのを生かし、生徒どうしが学び合うことに、さらに力を入れています。

「遵法精神、公德心」については、これまでは、「きまりを守るべきだと言えいいんでしょ」という生徒の心の声が聞こえるような授業になってしまったこともありましたが、今回のように問いを生む段階から、生徒自身に「考えること」を託して授業することで、予想外の考えが飛び出すこともあり、生徒どうしがお互いの考えを聞くことを楽しみにしているのを感じました。つい考えなくなる問いがあり、つい自分の考えを誰かに聞いてもらいたくなる、つい他の人の話を聞きたくなる、そんな授業ができたかと考えています。

平野先生の授業、ココに注目！

自分たちで考えた問いを自分たちで探究することは、生徒の「主体的に問題を発見し、解決していく力」を培っていきます。注目すべきは、生徒が考えた問いが、教材から導かれる問いから本質的な問いへと発展していることです。一見、生徒に「丸投げ」しているようにも見えますが、ここには教師の巧みなファシリテーション（状況の整理や補助発問など）が隠れています。「生徒を信じて待つ」授業を続けたからこそ、生徒は道徳的価値について主体的に考える力を身につけたのでしょう。

立命館大学大学院 教授
あらき かずとむ
荒木寿友

教材の内容(あらすじ) 動物園の入園係である元さんは、規則違反と知りながら、いつも門の外から動物園をのぞき込んでいた姉弟の「動物園に入りたい」という願いを聞き入れた。しかし、閉園時刻を過ぎても姉弟は戻らず、捜索が始まる。1時間ほどで姉弟は無事に見つかった。数日後、元さんのもとには、姉弟の母からの感謝の手紙と懲戒処分のお知らせが届く。元さんは自ら職を辞した。

1

教材を読み、自分がもった問いを出し合って、「クラスで考えたい問い」を決める

教師の問い 「二通の手紙」を読んで、
どのような問いをもちましたか。

- 元さんが残したもの（教訓）は、何だったのか。
- 姉弟が入園したいと言ったとき、元さんは、どうするべきだったのか。
- 規則は何のためにあるのか。
- 規則を守らなくてよいのは、どのようなときか。
- 規則と、正義や思いやりは、両立するのか。

些細な疑問も含めて、自分がもった問いを自由に出し合えるようにしたうえで、「クラスで考えたい問いは何か」と投げかけ、焦点化を図った。

2

焦点化した「クラスで考えたい問い」について、生徒自身で、話し合いを進める

生徒の問い 姉弟が入園したいと言ったとき、
元さんは、どうするべきだったのか。

- 自分が元さんなら、姉弟に付き添ったと思う。それくらいしないと、規則違反をすることへの責任を果たせない。
- 自分なら、絶対に入園させない。例外をつくったら、規則の意味がない。
- 姉弟を入園させてあげたい気持ちはわかる。姉弟の気持ちを尊重するにはどうしたらいいかを考えることも、必要ではないか。
- 例外的に、規則を破ってもいいときがあるのではないか。

生徒どうして、次の発言者を自由に指名し合う形式で話し合いを行った。挙手をした生徒の中から次の発言者を指名する場合もあれば、「同じように考えた人はいませんか」「別の見方で考えた人の意見も、聞かせてください」と投げかけ、自分が意見を聞きたい相手を指名する場合もあった。

生徒の問い 規則を守らなくてよいのは、どのようなときか。

- 必要のない規則や、自分たちに害のある規則は、守らなくてよいと思う。
- 規則の意味を理解していない場合もあるから、簡単に規則を破ることはできない。もし規則を破るなら、相応の覚悟が必要なのではないか。
- 災害時や戦時下などの普段と異なる状況では、守れなくなることがあるかもしれないが、命に関わる場合以外は、規則を守るべきではないか。
- 規則は、多数の人の安心のためにつくられているので、少数で気づかれにくいのが、その規則に苦しんでいる人もいるのではないか。

「どの問いから話し合いを始めるか」「それぞれの問いを、どのくらい話し合うか」といった話し合いの展開も生徒に任せ、有意義な話し合いになっているか、また、考えの深まりがあるかを感じられるようにした。

生徒の問い 規則と、正義や思いやりは、両立するのか。

- お互いを尊重し、マナーを守れば、規則は必要ない場合もあるのではないか。
- けんかや争いごとでは、どちらにも、その人たちなりの正義がある。正義は人それぞれ違うから、それぞれ大切にすべきだと思う。
- 正義と規則は両立しないと思う。「正義＝規則」だとは限らない。それぞれの正義が異なるから、絶対的な正義もない。
- 「規則＝正義」だと思うけど、正義は多数決でつくられている部分がある。規則も多数決でつくられているなら、少数の人のための例外も必要ではないか。規則があっても、思いやりでカバーすることも必要なのではないか。

▶「規則さえあれば、それで全てがうまくいく」わけではないのなら、
私たちは、どのように規則と向き合えばいいんだろう。

- 時代や状況に合わせて、規則を見直していく必要もある。
- 今ある規則が絶対的なものではないと知ったうえで、規則と向き合うとよい。

話し合いが抽象的な内容に偏り、理論上の議論に終始してしまいそうなときは、教師が状況を整理したり、自分たちに置き換えて考えるよう促したりして、実際の生活に結び付けられるようにした。

3

意見交流したことを基に、自分の考えをまとめる

教師の問い 意見交流を通して、どんなことを
考えましたか。また、自分の考えが
深まったのはどの問いに対してですか。
自分の考えを書きましょう。

- 「規則は、人を守るためにある」ということを、忘れてはいけないと思う。自分も他の人も守ることができる。
- 規則は、自分や社会を守るために必要だけど、絶対に正しい規則があるわけではないと思った。見直していくことも大切。
- 規則を破ることは、責任と覚悟が必要なことだと思う。
- 人それぞれに正義が違うから、規則が必要だと感じた。

考えがまとまらない生徒に対しては、今回の意見交流の中で共感したり、おもしろいと感じた意見を取り入れたりしながら書くように促した。

道德授業で 哲学鍋を

苦野一徳

Ittoku Tomano
(熊本大学大学院准教授)

「くやしき」って、何だろう？

小・中学生と、定期的に続けている「本質観取」。今回のテーマは、「くやしき」とは何か？

この本質があるから、私たちはそれを「くやしき」とよんでいる、という、この感情のいちばん根っこを探り当てる対話の始まりです。

**「くやしき」の本質がわかれば、
どんないいことがあるだろう？**

苦野 まずいつものように、「くやしき」の本質がわかったら、いったいどんないいことがありそうか、ちょっと考えてみようか。

にき (小5) サッカーの試合で負けた時、どうすればくやしきから立ち直れるようになるか、考えたいです。

みんな うん、やっぱりそれをいちばん考えたい。

りく (小5) 僕は、嫌な気持ちになった時、その自分の感情が何なのか、よくわからないことがあるんです。だから、そもそもくやしきって何なのか、考えたい。

苦野 なるほど、感情の正体がわかれば、それにどう対処すればいいかも見えてくるかもしれないよね。

どんな時に「くやしき」を感じる？

苦野 じゃあ、みんなが「くやしき」と感じた時の事例を挙げていこうか。

たくさん事例が集まると、その全てに共通するキーワードが見えてくるはず。

ようた (中2) 僕はカーリングをやっているんですけど、にき君と同じで、試合に負けた時はとてもくやしいです。

さゆ (中1) 私も、100メートル走で負けた時はくやしき。

とし (中3) 僕には弟がいるんですけど、ケンカした時、よく僕だけ怒られるんです。すごくくやしいです。

ようた めっちゃわかる!! あと、テストでケアレスミスした時もくやしき。

苦野 なるほど。できたはずなのにできなかったって、確かにくやしきね。

ようた 逆に、もともとできるはずがないってわかってたら、あんまりくやしきないかも。

みんな 確かに！

にき 人に誤解された時も、くやしきことがあります。

とし 僕も、趣味で俳句を作るんですけど、近所に住んでる有名な俳句の先生に見せたら、僕の人間性も含めて否定されたことがあって。それはとってもくやしかったです。

苦野 なんていうことだ。人間性もなんて、それはひどすぎる！

キーワードを見つけてみよう！

苦野 じゃあ、いま挙げてくれた、全

ての事例に共通するキーワードを見つけていこうか。

にき 期待が否定された時、という感じがなあ。

とし しかも、自分に自信があったのに、それを否定された時。

ようた 否定っていうより、報われなかった時、っていうのはどうですか？

苦野 なるほど、いい言葉な気がする。くやしきとは、期待が報われない時の感情である。どうだろうみんな、言えてそう？

ようた とし君が言ったように、その期待や自信が大きければ大きいほど、報われない時はくやしくなる気がしますね。

苦野 そっか、くやしきって度合いがあるもんね。ひと口に期待といっても、ささやかな願望から確信まで、幅がある。その幅に比例して、くやしきの度合いも決まってくるのかもね。

「悲しさ」との違いは？

ようた ちょっと思ったんですけど、期待が報われなかった時は、くやしき時もあるけど悲しい時もありますよね。くやしきと悲しさって、何が違うんだろう。

苦野 それはいい問いだなあ。本質観取をする時は、そうやって近い言葉との違いを考えると、より本質が浮かび上がってくる。じゃあちょっと「悲しさ」についても考えてみようか。僕は……この前、飼っていたペットが死んじゃった時、とても悲しかったなあ。

ようた あれ、でも考えたら、それも、ずっといっしょにいられるという期待が裏切られたってことですね。

さゆ 確かに。となるとますます、くやしきとの違いがわからなくなるなあ。

とし くやしきのは、自分ではなとなかったのに、それができなかった時なんじゃないかな。逆に、そもそも自分ではどうしようもない時は、悲しくなるんじゃないかな。

みんな お、おおーっ、確かに！ 言えてる！

りく でも僕は、悲しきとくやしきと、どちらも同時に感じることもあるんですけど。

みんな あー、あるある。

りく でもその時は、悲しいのか、くやしきのか、自分でも訳がわからなくなってるだけなのかも。

苦野 なるほどね。じゃあ逆にいうと、悲しきとくやしきの違いがある程度はっきりわかれば、自分の感情を理解して受け止めることもできるようになるってことだね。もちろん、「期待が裏切られる」という点は同じだから、同時に感じるのは不思議じゃないけど。

りく とし君の話で、くやしきと悲しきの違いはよく理解できた気がします。

本質を言葉にしてみよう！

苦野 ここまでの対話を通して、「くやしき」とは何か、言葉にできそうかな？

今日のまとめ

くやしきとは、自分の力でなんとかなったかもしれないのに、それができなくて期待が裏切られた時の感情。

苦野 いいね。すごく言えてると思う！ 例外や違和感はなさそう？

みんな うん、納得です！

くやしきから立ち直るには？

苦野 じゃあ最後に、にき君が初めに言ってくれた、どうすれば「くやしき」から立ち直れるかという問いを考えてみようか。……まあ、まずは、くやしきは、「なんとかできたのに」と思うからくやしきわけだから……、「いや、あれはどうにもならなかったんだ」って思うことかな。あきらめの境地（笑）。

ようた もう一方で、「なんとかできた」のにできなかったのはなぜか、その理由をちゃんと考えて、次につなげることもできますね。

苦野 げ、げげ。僕が言ったのより全然前向きな、いいアイデアだ（笑）。

ようた 「くやしき」は、僕たちの人生にとって、自分を前向きに振り返り、次に向けて成長させてくれる意義をもっているのかなと思いました。

みんな おおーっ、確かに！

「哲学鍋」とは、みんなの考えをもち寄りぐつぐつ煮込みながら、みんながおいしいと思える味（より本質的な考え）に仕上げていく営みをイメージしたものです。



苦野一徳 ● とまの いっつく

1980年兵庫県生まれ。熊本大学大学院教育学研究科准教授。専門は哲学、教育学。著書に『愛』（講談社）、『学問としての教育学』（日本評論社）など多数。